縣下蕃殖鳥類中注目すべき數種について

小　林　平　一

縣下に於て蕃　する鳥類についての正確な記錄はあまりなく，小林桂助，重田芳夫両氏「神戸附近鳥類觀察の手引」（日本野鳥の会神戸支部，昭１４年）の中に６４種の蕃殖鳥類を記載せられ，小林桂助氏「六甲の鳥」（兵庫縣中等教育博物学雜誌，昭１６年）に６２種の蕃殖鳥類を記載せられている。その中に縣下に於て正確な巣卵の記錄のないものが二，三あると云はれた。それにしても兵庫縣下に於て見られる鳥は，その後の調査に於て２２５種（迷鳥も含む），蕃殖鳥類６８種類の多数に上るのである。

その蕃殖鳥類中，我々の特に注目すべき鳥類及日本鳥学会神戸支部で小林桂助氏を中心とする其後の調査等について書き，未だ甚だ不完全な生態学及縣下の分布等に読者諸兄の御協力を願うと共に何かの御参考ともなれば幸甚と思う次第である。

⊙カフノトリ（留鳥）

朝鮮と本土の一部にしか現存していないこの貴重な天然記念物は，明治以前には鶴型の大型鳥類中最も多く居た様で，古い歌の中にも数多く見られ且つ比較的新しく開墾せられた様な地名の中にもカフノ池，鶴居等々本種に関係ある地名も多い。

カフノトリはタンチウツルと良くにて偉大であるが分類学上からはサギに近い種類で，分布は日本，アムール，　スリー，　那，印度，ビルマ等でヨーロツパには非常によくにたシユバシガ　ノトリを産する。

現在本種を見られるのは，京都府の一部と縣下出石郡の一部にしかないが，天然記念物として指定せられた出石町附近「鶴山」は昔の原始林は全部伐採し盡され，数多かつたサギ類と共に最近は本種の姿さへ見られない程になつた。

昭和18—19年筆者の調査では出石地方に親約鳥40—50羽，巣６ケを（１９年）見る事が出來「鶴山」附近の水田上には常に20—30羽もトビの如く氣流に乘つて高空に舞乍らクラタリングを響かせ実に圧観であつたが，本２３年にはこの附近に殆んど姿は見られず，出石町中心に数日を要して四里四方調査した結果約１羽の親鳥と３ケの巣を見る事が出來たに過ない。

終戦当時にはこの平和境にも相当道德がすたれた　見える。又この地の人達も大部分が田を踏み荒すとて敵対視している様で，　年五月神戸新聞にもこの事が出ている。

段々本種は出石から城崎郡愛宕山方面へ移動しているといはれるが本種の前途を思へば寒心にたへぬものがある。

本種がこの地に移動して來たのは日露戦役後で段々年と共に多くなつた模様（天然記念物調査報告第一輯）であるが，筆者が直接この種の保存に関係ある土地の川見氏や多くの古老に聞いたところでもやはりそれは一致していて始めてこの地に構巣したのも古い話ではないらしい。

本種はツル類の如く動植物混食でなく全く動物質のみ食する。又特に著しい特長は嘴をうち合せてカク，カタ，　タと高音で長くクラタリングを発する。從來本種は鳴声を発しないとされ，如何なる文献にも鳴声に関する記録はないが（外國の亜種にてはチェツ，　エツと発声する——「日本の鳥類と其の生態」）筆者は本年この亜種が「ヒーツ」と非常にかゝれて且濁つた大声を発する事を偶無発見した。其の後この声があまり見当外れの声であるので小林桂助氏に外國文献を数多く調べてもらつた結果，ヨーロツパのシユバンカ　ノトリも又偶然にこれと同じ声を発すると云う事が分つたので筆者もその間違いでない事に自信持つ事が出來た。

本種の蕃殖は，出石にあつて常に山のふもとから中腹迄の間の風当りの少い松の大木頂上に1.5—2m四方の偉大な巣を営む。

朝鮮に於では（小林桂助氏）樹木が違うので木の中途の枝に営れる物が多い。

筆者の出石に於ける観察では

4卵（一組）——4巣，3卵——3巣2卵——2巣があり卵期は3月下旬——6月中旬迄，

卵の測定の一例は，

79×54，80×54（mm）重さは，100.5g，113.9gで白色卵型，孵化率は悪く筆者の十数組の調査では約60%であつた。巣立日数は55——60日位である。（筆者観察の唯一例の巣立日数は53日であつた）

⊙ア　ヲ　：　ギ

本種は我國サギ類中の最大種だけに遠方を飛ぶ姿はカフノトリに見違へられるが首をまげて飛ぶので判別出來る。

兵庫縣を規準としていえば留鳥である又神戸附近を中心としていえば漂鳥である。全國的に見ても蕃殖地は極限された地区で小く記録としては北海道，本州，四國，　朝鮮（小林桂助氏「THE EGGS OF JAPANESE BIRDS」がある。縣下では唯だ出石郡のみしか知られていない，且関西に於ける唯一の蕃殖地といつても過言でない位である。

筆者18—19年度の調査では，出石地方　フノトリの巣の近くに必ず本種のコロニーがあり特に「鶴山　に於では多かつた。しかし本23年度にこの地方では殆んど姿を見る事が出來ず，約一週間探して唯巣1ケ，親鳥2，3羽を観察したのみであつた。

本種が蕃殖期田を荒す事と，松林を枯死せしめるとの理由で徹底的に迫害されたからであろう。本種の蕃殖は出石地方カフノトリ巣近くに十数組が一ケ所に集團営巣しゴイサギ，　ウサギより巣の位置が高く巣も大きく深い。卵数は3——5，4卵が普通であり卵は卵型ゴイサギより青味が濃く大きい。卵期は4～5月中旬迄，卵を取られても次々　卵し補充産卵性を有　る。

筆者出石に於ける卵の測定の一例は

61×42——（54，5g），61，　5×44——（55g），　62×45——（55g），61×43——（54g）mm（一組新鮮卵）で，11組37卵中の最大は，63×46——（57g）mm　小は，57×42——（45g）mm。

本種の鳴声は鼻声で，ゴツ，ゴアツ，ギアツ，ギヤーツ等でゴイサギよりいつそう物凄い。

○ア　マ　サ　ギ

我が國には仲々少い小型の白サギで夏鳥である。確実な巣卵の記録は内地に於て甚だ少く，5，6年前迄は内地よりの本種の卵の標本はなかつた様である。

ゴイサギ，チウサギ等に混じて少数蕃殖するが，ゴイサギより小型且氣をつければ美しい頭から胸への橙黄色が目につき且つ，蕃殖期に入ると黄色の嘴が特に雄に於て美しい赤黄色となりコサギ，チウサギと判別出來る。

縣下に於て，筆者の観察は19年（中村保夫氏発見）神崎郡香呂村に於て，ゴイサギ200羽，コサギ2羽，アマサギ40羽ヨコロニー（7月6日）及び19年5月21日，姫路西方網干駅北方1㎞の地点にも本種のコロニーがあつた。

この珍らしいサギのコロニーは普通シラサギ位いに思つて見逃される事が多いと思はれるがまだまだ縣下各所に蕃殖地はある筈である。本種の蕃殖は縣下に記録は従來なかつたが，特に多く見られのは姫路西方網干附近で，19年には数百羽が見られた。

構巣地は年々変へ少しの動機ですぐ場所を移轉する様である。この種の営巣地は細長い密生した若松林であり，関東の例では竹藪中に構巣するとの事である。（日本鳥学会雑誌「鳥」復刊第1号）巣の高さは地上5—6m，蕃殖期の警戒心はゴイサギ程ではない。卵期は縣下に於ては5月——7月上旬迄，巣と卵は全くゴイサギと同様で筆者の観察の10数例ではゴイサギよりも巣は若干ていねいに出來ていてゴイサギよりも皿型が少し深かつた。卵数は4～5卵，4卵が最も多く卵色はゴイサギと全く同様で青い。卵の測定の一例は，

49×36，46×35，46×35，46×34（mm）（以上4卵1組）

で，6腹分24卵中の最大は，49×36，最小は44×33（mm）であつた。尚，ゴイサギの卵の最小は47×35mmでゴイサギ卵小型の物と殆んど同大で巣と卵による判別は全く出來ない，

多くの文献中たいていの物に青白色として，ゴイサギの卵と色彩を区別して記載されているが，これは間違いで，標本にして約一ケ月も過れば段々青白色となりゴイサギ，チウサギとは一見区別出來る様になるが，我々が自然を対手として研究する以上，記載はやはり自然に於ける原色を記載すべきである。

野外に於て本種を巣と卵にのみによつて判定する場合，この点充分な注意が必要である。

○コモモジロ（夏鳥）

従來の蕃殖記録には，九州（下村氏「原色野外鳥類図譜），本州，（埼玉，千葉縣）（小林氏「THE EGGS OF JAPANESE BIRDS」）が知られているのみで，卵の標本も唯だ一ケ（黒田侯所藏）の記載がある。鳥学会誌「鳥」の齋藤氏によれば卵期は4～6月，卵数3～4個，榎本氏「野鳥便覧」によれば卵数3～4卵はチウサギの卵と略々同様で只大型とある。

原色の小林氏の著書中，黒田侯爵の唯1卵の標本とチウサギの卵と比較するに，卵は少しく大きく卵色は大分違う。本種も又アマサギ同様に標本になれば色彩の変化が大きいのかも知れない，大きさに於ても大差がないので野外に於てはチウサギ，ゴイサギと混同されると思う

が，齋藤氏によれば松の高所にのみ構巣するとある。

親鳥もチウサギと甚だよくにて唯だチウサギより少し大きく，足首，嘴が長いのと下頸部の長い飾羽がない事によつてのみ区別出來るが，　際野外に於ての区別は甚だ注意を要する。縣下に於て親鳥の記録はあるが，巣卵の確実な記録は無く見鳥も甚だ少い。

しかし筆者は昭和１９年5月１日，網干に於て　サギ，アマサギ，ゴイサギ，コサギ，コモモジロ総数５００に余る大集團のコロニを観察した事がある。この時は丁度卵は１卵もなく（少数はあつたが附近の子供が毎日の様に鶏卵代用に採集していた）実に残念であり，卵の正確な実物は見る事が出來なかつた。

本年（２３年）その附近数里の間を探巣したが甚しい水不足の爲か親鳥１羽も見る事が出來なかつた。しかし，必ず縣下にまだ蕃殖地はある筈である。

⊙タマシギ（留鳥）

本種は学名の示す通り熱帶鳥類の一種で旧北区に迄分布蕃殖する稀例であり，又その習性も甚だ他鳥類と異にし鳥類中特異の存在である。即ち本種は雌の方が雄より大きく又非常に美しく蕃殖期には雄がひたすら抱卵し雌は大声を発して鳴き続ける，普通の鳥類と全く反対なのである。

兵庫縣に於ては從來冬鳥とされていたが，其後の調査によれば留鳥である。我國蕃殖の記録は甚だ少く，九州（福岡）（川口孫次郎氏「日本鳥類生態学資料」）本州（千葉縣）（小林氏 THE EGGS OF JAPANESE BIRDS）の三，三例で，琉球，台湾には少し蕃殖するので，小林桂助氏，関公一氏の標本中にも２，３あるのを筆者は見せてもらつた事があるが内地に於ては親鳥自身珍らしい。しかし冬期は案外各地で捕れた記録はある。

蜂須賀侯爵の御手紙によれば本種は蕃殖期雌が多数の雄を得るために爭うかも知れないと云う学説があるが，これは最も多く蕃殖する印度に於ても確証がない，との事。

１婦多夫性である事は筆者は確認出來たが雄を得るために雌が爭うところは観察出來なかつたので目下この学説の正否探研の爲大いに観察中である。

縣下に於ては淡路島に於て小林桂助氏が蕃殖期鳴声と幼鳥を見られ，蕃殖するのを確認せられた（小林氏，「野の鳥山の鳥」）ところが昨２２年遂に神崎郡船津村大澤に於て（姫路北方４里）巣と卵が発見せられた。この同定は筆者が小林桂助氏に依頼した事か　判明し本年も二巣が発見せられた。

巣は濕田の地上草間，或いは田の中の稻かぶの間にある甚だ発見しやすい簡單な巣で，筆者の縣下に於ける３４ケの巣の卵期は，６～８月下旬迄，抱卵日数は１９日――川口氏「日本鳥類生態学資料」）卵の測定の１例は

４０×３０mm（１３.５g）（新鮮４卵中の１卵）で卵色は黄灰色地色に黑褐色疎大斑があり卵数は普通４卵であつた。しかし多くの雄に順次に抱卵させて行くのであるなら一巣分を一腹の卵数とはいへない。（本年は一雌が三巣に８卵産下迄観察した）　巣を発見すれば必ず近くに他の雄の抱卵中の卵を見出す事が出來る。

鳴声は　ヴア　ウーオ（ウーオが高い）ヴアウ　ーオ」と連続5，6回　この声は底音で3，4百m離れでは聞きとれぬ位い）その直後「〝コーウッ，〝コーウ〝」（ッは発音しない）と連続10～20回（これは非常に高声で1000m以上離れでも完全に聞える）

普通文献には「ポン，ポン」と書いであるがこの声はこの場合ポンポンと書く時「ポ」より「ン」のネが高いので，そのつもりで読まぬと実感にとぼしい。

蕃殖期行動範囲せまく巣から200m以上離れで鳴く事は殆　どないので鳴声を探知れば必ず巣は附近にある。蕃殖期に入れば4月～10月迄朝，晝，晩を問はず特に夜は鳴き明す時が多いが，巣卵を取られたら20間ばかり全く現金にもピタリと鳴かなくなる。当地に於て約1000m平方の一部落内に3ケ所の蕃殖地がある。

最近の調査によつでは，縣下揖保郡の一部，及び釜江氏によれば加古郡にも蕃殖する様である。近縣では小豆島淵崎村にも蕃殖する事が分つた。（八代田貫一郎氏）

縣下各地にまだまだ蕃殖している事は間違いないが，「コー〝，コーツ」という鳴声があまりに見当外れで且つ大声であるので一般に本種と氣付かぬのであろう。

抱卵は雄のみで行い且つ鳴声を発するのは雌だけであるが，カフノトリでさえ発声するのである故本種の雄も何んとか鳴き声を発しそうなものである。（従來の文献にも雌は発声し雄は鳴かぬと出でいるし筆者も長い観察中に雄の発声を未だ実見していない）

しかし雄は抱卵中鳴かぬかわりに外敵が近づけば擬傷して大きい「ジリジリジリジリシヤーツ」という羽音を発する。

⊙ミ　サ　ゴ

トビ大の鳥で海上や池で高い所から急角度にバシヤツと水に飛込んで，一尺に余る魚を悠々持去るこの鳥は，少い鳥ではないが蕃殖の記録は少い。従來，北海道（小林桂助氏）本州，九州，伊豆七島，対島，五島に蕃殖となつでいるが巣卵の確認せられたものは唯々2，3にぎぬ様である。

縣下には淡路の沼島に蕃殖するといはれるが巣卵の確認ではない。近い所では小豆島にも毎年蕃殖している様であるから案外瀬戸内海の小島にもつと多数蕃殖している事と思はれる。構巣場所は岩壁棚上及樹上高所である。卵の大きさは61×46mm，小林桂助氏御所藏の北海道北見の唯一組の標本は1937年6月下旬の三卵，卵色は白色に赤褐色斑密。

⊙カンチイ　ホアカゲ〝（留鳥）

本種は以前六甲山にも居た由であるが少い鳥で，筆者の観察では神崎郡，笠型山（960m）にも少なからず居る。縣下から未だ巣と卵の報告はない。

次に蕃殖の確証は未だないが少数蕃殖する可能性のある種類次の如し。

⊙アラジ，⊙ヒガラ，⊙キビタキ，トラツグミ，⊙ツツドリ，オホタカ，⊙オホヨシゴ，⊙イソシギ，⊙ヒクヒナ（以上⊙印最も可能性あるもの）

今後これらの鳥類の蕃殖が次第に判明される事と思はれる。（了）（1948—7—19）